

「第10回 国際TDM会議」参加印象記

片桐 文彦
Fumihiko Katagiri

大分大学医学部附属病院薬剤部
Department of Clinical Pharmacy, Oita University Hospital

平成19年9月9日から14日の6日間に渡り、フランス・ニースにおいて第10回国際TDM会議 (International Congress of Therapeutic Drug Monitoring & Clinical Toxicology, ICTDMCT) が開催されました。本会は隔年で開催されるTDMの国際学会で、日本TDM学会では国内のTDMの発展のため、「国際TDM会議」派遣賞 (海老原賞) が設けられております。今回、光栄にも筆者等の演題「Trial to Routine Therapeutic Drug Monitoring of Anti-MRSA Agents Using Free Drug Concentrations」が採択されました。本誌面をお借りして、海老原昭夫先生並びに選考委員の先生方に深く感謝御礼申し上げますとともに、ここに、ICTDMCTへの参加報告をさせていただきたいと思っております。

ニースは、フランスの南東部、プロヴァンス＝アルプ＝コート・ダジュール地域圏に位置する都市で、地中海に面する世界的に有名な保養地・観光都市です。会場のアクロポリス国際会議場はニースの中心部に位置し、新市街の程近く、国立歴史博物館や、美術館、図書館、映画館などを周囲に配したとても現代的な会議場でした。

筆者は本学会に参加するのは初めてですが、いくつかのセレモニーを始め、16のワークショップ、7つのシンポジウム、2つのサテライトミーティングの他、300題を超える一般演題 (口頭発表約100題、ポスター発表約200題) と非常に充実した内容でした。日本からの一般演題は筆者の演題を含めて14題 (口頭2題、ポスター12題) で、全体の5%弱と、日本TDM学会学術大会での賑わいを考えると少し寂しい気がする演題数でした。

内容的には、企業からの新規分析方法の開発や、分析方法による測定値の検討など分析化学に関する発表から、PK/PD解析、近年のTDMにおいて大きな位置付けをされている遺伝子多型に関する発表など、臨床に直結する報告まで、発表内容は多岐に渡り、大変勉強になりました。内容的には、一般演題の約25%が測定系・測定法に関する発表で、免疫抑制剤のより高精度な測定法に関する発表が多いように感じられました。逆に、本邦での学会では多数見受けられる、PK/PD解析や遺伝薬理学 Pharmacogenomics関連の発表が比較的少ないことに少々戸惑いました。せっかく多岐に渡る発表内容の中、演題数に少し偏りがあることが残念でした。ワークショップは極めて一般的な内容から最近の注目されている話題まで、網羅的に取り上げていました。シンポジウムは遺伝薬理学などを含んだ、最近の話題が中心になっており、最新の情報を入手することができ、大変有意義でした。

筆者が直接見た限りでは、口頭発表は参加者の入りも良好で、盛んなディスカッションが行われていましたが、ポスター発表はワークショップと日程が重なっていることも災いしてか、口頭発表ほどの賑わいはないように感じました。ポスター発表も口頭発表と同様に座長制で、パート毎に座長の先生が回って来られて、演者が簡単な概要説明を行った後、ディスカッションという流れでしたが、ポスターを掲示しているにもかかわらず、発表時間に不在の発表者も多く、座長の先生方もかなり困惑されている様子でした。

筆者が発表いたしました演題内容を簡単にご紹介します。抗菌薬のTDM, 特に抗MRSA薬 (vancomycin (VCM), arbekacin (ABK), teicoplanin (TEIC)) はその使用に際し, TDMを行うことが推奨されています。しかし, 血中濃度測定値だけでは, 十分な効果を予測するには至らず, 近年, PK/PD解析等, 新たな試みが行われています。筆者らは, 実際に組織に移行し, 薬効を示す遊離形薬物濃度に着目し, 遊離形薬物濃度が, 従来の総濃度を指標にしたTDMに優る指標になりえないかと考え, 既存の測定法を用いた日常的な遊離形濃度測定を試みました。既存の方法にて遊離形濃度が測定可能であった項目 (VCM, ABK) について, 総濃度および遊離形濃度を測定する一方, 細菌学的・臨床効果判定を行い, 総濃度, および遊離形濃度との関係を解析しました。結果, VCMのみ, 有効性に関しては総濃度と劣らない指標になりうる可能性を提示できました。しかし, 座長の先生や他の参加者から, 試み, 結果は興味深いものの, 有効濃度域の設定など, 従来のTDMに取って代わるには依然情報が少ないとのご指摘や, 解析に関するアドバイスをいただき, 今後のデータ集積・解析を行っていく上で大いに参考になりました。

ワークショップは事前登録制で, 筆者は発表の日時の都合もあって, 毒物動態学のワークショップ「Toxicokinetics: Just Theory or a Necessity in Toxicology」に参加しました。「毒物動態学」「毒性学」は筆者にとっては日常あまり耳にしない分野でしたが, 新しい分野に触れることのできるまたとない機会と思い, 参加を決めました。内容は概論「毒性学とは」から始まって, 具体的な症例提示, それらに対するディスカッション, さらに教育講演と初心者である筆者にも分かり易い構成になっていました。筆者がTDMを担当してから, 何度か経験した中毒症例に類似した症例も提示され, 日頃の経験が活かされた一方で, 滅多に経験することのできない死亡症例なども提示され, 中毒時の対応法など, 大変参考になりました。中毒症例はこのような症例報告の積み重ねが非常に重要であることを再認識しました。ある物質を薬物として捉え, 安全にかつ有効に使用する目的で体内動態をモニタリングするのが, TDMですが, 同じ物質を「毒物」として捉え, 血中濃度と中毒症状の関連, さらに中毒濃度に至った原因を精査する「毒物動態学」はある意味でTDMと表裏一体の関係にあることを認識するとともに, 本ワークショップの標語として冒頭に紹介された薬学・毒物学の祖パラケルススの言「この世に毒でないものはない。あるものが毒になるか薬になるかはその用いる量によるのである」を再認識させられる貴重な時間でした。

本学会に参加し, より深くTDMに触れることができ, 薬剤師としての職能を高めることができました。また, 海外での研究発表という貴重な経験ができ, 筆者の人生において大きな財産にもなりました。第11回ICTDMCTはカナダのモントリオールにて2009年8月3日から8日に開催予定とのこと。次回も是非参加できるよう研鑽を積んでいく所存です。

末筆ながら, このような得難い機会を与えていただきました, 日本TDM学会の先生方並びに本研究に協力していただきました先生方に深甚なる謝意を表し, 筆を置くことに致します。